

江戸蕎麦ものがたり
遊牧民の慣習が生んだ未来の種
～栽培蕎麦の大陸北上～

江戸ソバリエ協会
理事長 ほしひかる

☆栽培蕎麦の起原地

人類による蕎麦栽培は、中国南部の三江地域で始まった。

大西近江(京都大学名誉教授)が発表してから、これが定説になっています。

三江^{きん さ こう}といふのは金沙江(長江上流)、瀾滄江(メコン川上流)、怒江(サルウィン川上流)

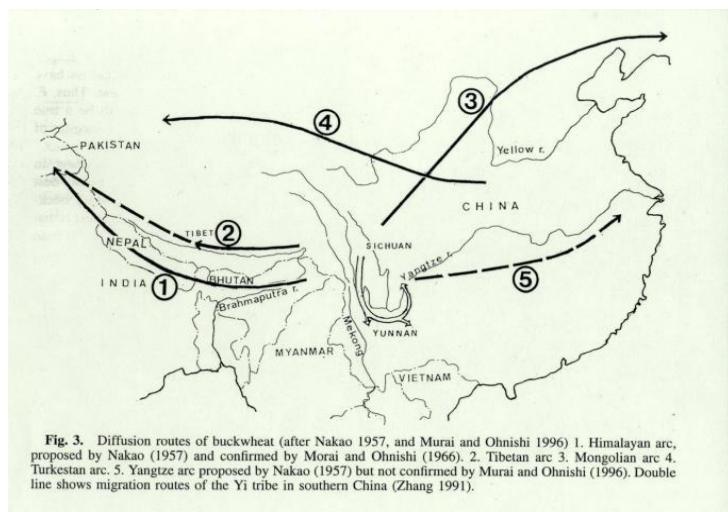
の大河のことで、このうちの金沙江、瀾滄江上流の渓谷およびその支流の谷一帯が栽培蕎麦の起原地だそうです。行政区でいえば、四川省、雲南省、チベット自治区東方の三地区の境界辺りです。始めたのはいまから約5000年前に当地に住んでいた民でしょうが、彼ら少数民族の盛衰史を辿るのはなかなか困難なため、誰が始めたかというの簡単には分かりません。候補としましては、「彝(yi)」族説がよく言われますが、彼らは中華人民共和国成立時に、もともと夷(yi)族とよばれていた民族を中心に関係する多くの少数民族が統一させられてできた民族ですから、史実を明らかにすることは難しいところです。

それよりも、古羌族を祖先とする羌族も優先候補にならうかと思います。理

由は「羌^{きょう}」=「qiang チイアン」と「喬^{きょう}」「蕎^{きょう}」=「qiao チ ィアオ」との発音が類似しているからです。漢民族が「蕎麦」という植物を知ったとき、「スクスク伸びて高(喬)くなる植物を、『羌』族が食物として食べていた」ことから、「蕎」という字を創ったのではないでしょうか。

ともあれ、そんな栽培蕎麦の種は二江の渓谷から、(一)はヨーロッパへ(下図の④)、(二)は『北上』し(下図の③)、朝鮮半島を経由して対馬へ飛び、そして遙かなる日本の縄文時代晚期の北九州へと上陸しました。

しかし、文明というのは主として東西交流が盛んだったようです。シルク・ロード然り、コロンブスのアメリカ新大陸発見然りです。ですから(一)のルートは分かります。ですが(二)の北上ルートの理由、あるいは南北交流ということが私には分かりませんでした。そんな疑問をいただきながら、数回の中国訪問やモンゴル国への旅を重ねていきましたが、かの国は日本とはまったく異なる多民族国家であるところから、段々と遊牧民族の存在が気になり始めました。



【栽培蕎麦起原地と伝播ルート、中国地図】

☆遊牧民の農業

1) 最初に、気付きのきっかけとなったのは、2011年に日本橋そばの会の皆さんと、北京から北東へ約300km離れた承德市郊外の張三營村へ、伝説の「皇帝が愛した白蕎麦」を求めて行ったことでした。その蕎麦好きの皇帝というのは、清国6代皇帝乾隆帝のことです。

1762年(*),承德の離宮に来ていた乾隆帝は、秋になると文武百官を率いてさらに北の木蘭の狩場に向かいました。その途中に立ち寄ったこの村で食べた《白蕎麦》をたいそう気に入られたと伝わっています。

清というのは、北華の遊牧民・満州民族が建てた国です。首都は順天府(北京:北緯39度54分)、そして承德(40度58分)を副都にしていました。このとき、私は副都設置について深く考えることはませんでした。

ところが、清国の前にモンゴル民族が建てた元国においても、冬の首都**大都**(北京：北緯39度54分)と、夏の都**上都**(内モンゴル自治区シリンゴル盟正藍旗南部：北緯44度付近)を設けていたことを知りました。

ここで、にわかに「遊牧民族」の動きが、蕎麦の種移動の鍵になるのではないだろうかと予感めいた思いをもち始めました。

ただ、私たちは現在、「農耕民族」とか「遊牧民族」と言ったりしますが、これはあくまでも生活環境の違いから見た呼び方であって人種上の区別ではありません。私たちの遠祖は、1万年以上前に、植物(麦)の栽培と動物(山羊)の飼育を始めたのですが、後に生活環境から農業の民と離れて半牧半農の生活を始めた人たちがいたのです。ですから、少なくとも東アジアでは第二次世界大戦以前には「遊牧民族」という概念はなかったようです。

その証拠に、春秋戦国、秦、前漢、新、後漢、三国(魏・吳・蜀)、晋(西晋・東晋)、五胡十六国、南北朝(南の宋・北の北魏)、隋、唐、五代十国、宋(北宋・南宋)、元、明、清、中華民国という4000年以上もの中国史のうち、南北朝の北魏(東魏・西魏)、北斉、北周はいまでいう遊牧民族が興した国であり、続く隋、唐は漢化した鮮卑系民族が建て、宋(北宋・南宋)もまた遊牧民系といわれており、元は明らかにモンゴル民族が、清もまた満州民族が建国していますから、とくに「遊牧民族」云々という見方はなかったのです。

ただ、中原の人から見て辺境に住む言葉も文化も違う民のことを「異民族」と呼んでいたところ、それがいつのころからか半牧半農生活のモンゴル人を「遊牧民族」というようになってから、その言葉が定着したのだそうです。

2) その後、司馬遼太郎の言葉に出会い、「腑に落ちた」感じがしました。

司馬が言うには、農耕民族(この論の場合は、漢民族)の近くに居住する遊牧民族(この論の場合は、モンゴル民族)は半牧半農の民になると述べています。

それから数年して、吉田順一(内陸アジア史学会顧問)の論文に出会いました。
・それによりますと、内モンゴル東部のナルハ=モンゴル族は、黍の種を播くと黍の世話をせずに、すぐ家畜を連れて夏の牧地に移り、そして降霜前に耕地に戻ってきて黍を収穫するという農耕を20世紀後半まで行っていたそうです。
・さらには、満州国による内モンゴル東部地区の調査(1941年)があります。旧暦4～5月ごろ、彼らは黍・蕎麦の種子を原野にばら撒き、鋤で種子も草と一緒に鋤き返し、そのまま5～8月ごろまで遊牧に専念、秋に帰って来たとき管理してなかった作物が逞しくはびこっているのだそうです。

・また、こうした農耕は奚(4～10世紀、モンゴル高原から中国東北部にいた異民族=遊牧民)、契丹(4世紀ごろからモンゴル国、中国東北部、極東ロシア地域にいた異民族=遊牧民)も同様であった可能性がある

916～1125年に遼王朝を建国)も行っていたことは史料で確認でき、遼の烏桓(紀元前1世紀～紀元後3世紀に内モンゴルにいた異民族=遊牧民)も同様であった可能性があ

るというのです。

作家(司馬遼太郎)の洞察力の証となるのが、学者(吉田順一)の上記の論というわけです。今度は納得感をもちました。

4000年前の最古の粟・黍麺が辺境の青海省やウイグル自治区で出土したのは、粟・黍・蕎麦が異民族の農耕でしたから、歴史上からも当然のことだったわけです。彼らは土器製作に倣って手縫りの麺を作っていたのだと思います。



3) その後、江戸ソバリエの仲間たちと北京プロジェクトを組んで、2018年3月、同年11月、2019年11月と、南は貴州・雲南省、北は再び河北省承德市を訪れ、日中蕎麦学セミナーを開催して講演や日本式(江戸式)の蕎麦打ちを披露したり、また北京外国语大学などで講演を行ったりしました。

その間、当地の先生方とお話しして、蕎麦麺はとくに四川省、甘粛省、陝西省、河北省、内モンゴル自治区でよく食べられており、なかでも《餈餡蕎麦麺》という「押出蕎麦」が多く見られるということを聞きました。「餈餡」というのは、中国黄土高原を調査した深尾葉子(大阪外語大学)によりますと、粘り気の少ない雑穀を麺にすめために考案された押出式の製麺器だとのことです。やはり蕎麦は粟・黍とともに辺境の人々の大変な食べ物だったのです。

☆遊牧民のささやかな日常

ところがです。

2025年に全麺協の人たちとモンゴル国を訪れる機会がありました。

MIAT502便(モンゴル航空)は、成田 → ウランバートルへと飛行します。途中、ソウル → 北京 → 内モンゴル自治区上空を過ぎたころ、窓からゴビ砂漠が見えました。ここまで来ればウランバートル空港への着陸はすぐです。眼下のゴビ砂漠を境にして内モンゴルとモンゴル国が分かれているのだと思うと、妙に砂漠が象徴的な存在として映りました。人口でいえばモンゴル国には約350万の国民がいて、内モンゴル自治区にはほぼ同数のモンゴル人が生活しています。しかしながら、先述しましたように内モンゴルの人たちは《餈餡蕎麦》など蕎麦食(餈餡)の慣習があるのに、モンゴル国の人たちには蕎麦食の慣習がない

というのです。どういうことでしょう？

聞くところによりますと、遊牧には次のように三つの形態があるようです。

・遊牧：季節や牧草の状態に応じて広い範囲を移動しながら生活する牧畜の形態。

・移牧：季節に応じて定期的に家畜を異なる場所に移動させ、放牧する牧畜の形態。

・放牧：決まった草地や山などに放して自由に草を食べさせる牧畜の形態。

「移牧」は、遊牧民の人たちの一般的な形態であって、いわゆる半牧半農の人たちです。しかし、コビ砂漠より北のモンゴル国は環境からやむなく完全遊牧の形態をとってきたという違いがあるそうです。

前者の半牧半農の民たちは拡大家族で夏营地、冬营地の占有的な牧地で移牧生活をしています。この移牧の日常生活の民族的記憶は、定着して大帝国を建ててからも消えることはありませんでした。それが元国や清国の夏の副都制なのでしょう。

そして、移牧生活のなかで見逃せないのは、**交易活動**が欠かせないことです。乳、毛皮、肉と引き換えに穀類などの食料や家庭道具を手に入れなければなりません。そこに**蕎麦の種の交換**があったのでしょう。それを移牧の前に播いて出発するのです。

こうした半牧半農の民たちの南北移牧のなかの、平凡で、ささやかな日常生活の一つに**蕎麦の種の交換**があったことは十分想像できます。それが栽培蕎麦の南北流通路という大きな事実となりました。そして種は、中国東北部から朝

鮮の北方に居た遊牧民歲貊族^{わいはく}の手に渡ったのでしょう。やがて、朝鮮半島を経由した蕎麦の種は海を越え、対馬へと渡って北九州に上陸し、日本の未来を拓く種になるのです。この雄大な歴史は、遊牧民たちのささやかな日常が生んだ物語だともいえます。



【モンゴル草原☆ほし絵】

《清朝皇帝が愛した白蕎麦》の記

石臼で挽いて篩にかける。これを4回繰り返す。その粉を陶製甕(口直径54cm×深さ75cm×底直径40cm×陶器の厚さ4cm)に入れて熱湯を注ぎ、捏ねる。水は村の名水「龍泉の水」(軟水と思われる)。まだ柔らかい塊を甕から取り出し、延し板(長さ70cm×横35cm×厚さ2cm)に載せる。延し棒(長さ70cm×直径4cm)は一本。塊は柔らかいため友粉をたっぷり使うが、少し延したら、すぐ切りに入る。庖丁は両柄(長さ56cm×刃の長さ36cm×幅8.5cm、重さ700g)、それで撥ねるように切断する。切り口は三角形。麺の長さは25cmほど。そして茹である。

中国ではこれを《刀撥麵》とよびます。

なお、当店では押出器で作った蕎麦麺もありました。



[隆化県張三営村「百家春酒楼」にて]

追記

ここで見られるように陶鉢・延し板・延し棒1本が中国式道具でしょう。

そして蕎麦打ちが日本に伝來した鎌倉・室町時代の道具も似たようなものだったのでしょう。それが段々に日本化していき、やがては木鉢・広い延し板・延し棒3本の江戸式道具に進展していったものと推察しています。

注)敬称略

《参考》

*日本の《白い蕎麦》更科堀井の創業も乾隆帝が張三営を訪問した同じころの18世紀半ばです。

- ・大西近江「栽培ソバの野生祖先種を求めて一栽培ソバは中国南西部三江戸地域で起原した
一」(『ヒマラヤ学誌』)
- ・司馬遼太郎『草原の記』(新潮文庫)

以 上